

2002 賀  
 2002 賀  
 2002 賀

A HAPPY NEW YEAR

てぶとやせ 北斎漫画  
 Fatty and Slender. By Hokusai



FLIGHT

ウラジオストクへ

荒れ狂う日本海を眼下に、ウラジオストク航空808便はゆらゆらと飛び立った。機内は、正月の里帰りのロシア人達と、日本人旅行者で約半分ずつ席を分け合い、満席となっている。ただでさえ狭い機内は2つの毛色の人々の熱気で息苦しい。「怖いものが見たいならロシアの飛行機に乗ってごらん?」と言われるほど悪名高いロシアの飛行機。..それほどでもない。噂に聞いた隙間風もない。冬の嵐のせいで、小さな翼は木の葉のように風に飛ばされそうに舞い上がったけれど、ひるむことなく力強く、黒く覆い被さる空へとまっすぐに上昇し、厚い雲を突き抜けてしまうと、ウソのように落ち着いた。機内前方の座席を占めるロシア人達の背中にもほっとする様子が見えなかった。彼等も私達同様あまり感情を表に出さないように見える。飛行機が上昇した上空には、見わたす限りの雲海が広がっていた。そして夕暮れ時の大きな太陽が、それを白く、赤く、黒く照らし出している。乗客たちはただ黙ってその光景を見つめている。1時間あまりのフライトの中で、乗務員達は精一杯のサービスをしているが、悪天候のため機内が落ち着くまで思うように動けなかったらしい。狭い通路で苦勞しながら、ロシア人スチュワーデスが飲み物と軽食のサービスのために行き来している。時間が足りないか見えて大急ぎで廻っている。誰も彼も黙々とその簡単な夕食をすませた。ウラジオストクへの着陸は離陸の時のようには揺れず、窓からうっすらと白い地面が見え始めると、飛行機は音もなく滑走路に滑り降りた。タラップを降り、飛行場のコンクリートを踏みしめ空を見上げた。冷たい金属に触れたような空気が顔を覆った。遠くの白樺林に低く長く雲がかかり、上空は清潔に澄みきって、星が宝石のようにキラめいている。そして一段と高い所には尖った三日月が氷のように光っていた。シベリアの空が、新しい世紀を迎えようとしていた。

2001年 シベリア旅行の思い出より

COLUMN

鎌倉の猫事情 第二十四話

猫はお正月には何をするんでしょうか？  
 な～んにもしません。  
 何だかうらやまいよな、つまらないよな、ですが、このあたりが猫と犬の違うところなんじゃないでしょうか？  
 犬は人間家族の変化を敏感に感じとって浮かれたりして、怒られたり、散歩に連れていってもらっても町の感じが何かいつもとちょっと違うなんて考えたりするんじゃないかしらん？  
 長年色々な猫と付き合ってきましたけれど、猫に限っては、そんなこと気にしたりしません。  
 猫は犬に比べてあまりお利巧ではないせいもあるでしょうが、猫はたいてい自分の事しか考えないものです。  
 忠犬ハチ公みたいな思い詰めるタイプの猫は世界中探したって一匹もいないと思います。賭けたっていいです。何十キロも歩いて帰ってきた猫もいるなんて言ったら、その猫にとっても都合がいい場所だからなんで、人間が思い描くような事情があるわけじゃありません。  
 人間の方で猫が好きなので、美談にしてしまうのでしょうか。まったく猫好きな人は多いです。骨董屋の梅ちゃんも本当に猫好きです。毎日猫を相手に晩酌するのが何よりの楽しみです。ところが、スィービーを我が家へ里子に出した後の梅野家では、数々の不幸が重なっていました。梅野家にはスィービーの母である黒猫とその夫のヒマラヤンがいました。そして二匹から産まれた子猫が五匹。他にもともといた猫が二匹。犬二匹、挨拶する賢い九官鳥、拾ったひなを育てた鳩、蟹数匹、フナ、メダカ多数が、手狭な家に人間七人と共に暮らしていたのです。ところが四匹の子猫がもらわれて行き、最後まで残った子猫をみじめちゃんと名づけて大切に育てていたのですが、ある日子猫が行方不明になり、心配して探しに出た黒猫が事故で亡くなり、ふらりと遊びに出掛けた父猫のヒマラヤンも事故にあい、さらにもう一匹も同じ目に。犬や九官鳥たちも老衰やなんやらそれぞれの事情で亡くなって行き、鳩も巣立って行きました。残ったのは年老いた白猫一匹というありさまでした。その後、梅野家を訪ねたとき、変わり果てた家の様子に一目で家族達の悲しみを知りました。そんな時、里子に出したスィービーの初めてのお産は、久しぶりの朗報だったことでしょう。それもスィービー似の色白で可愛い女の子です。それこそ梅野家の望んでいた通りの子猫なんです。産まれたのは一匹だけだったのです。母猫と引き離すタイミングだって難しいだろうし...そんな風に人間達が勝手な思いをめぐらせていた頃、スィービーにまたしても懐妊の兆しが現われ始めたのです。

to be continued

